

'91 ジョーンズカップに参加して

国際公認審判員 小池 正夫

ジョーンズカップとは、ウィリアム・ジョーンズ氏(前 FIBA 事務総長)が、政治問題等で公式の国際大会に参加できない国々のために、それらの国々におけるバスケットボール活動を発展させるため自らカップを提供し、設けられた大会である。全世界で、この名をもつトーナメントは5~6カ国で開かれているようだ。アジアでは、台湾で毎年男女各10カ国前後が参加し、6~7月にかけて開かれている。

今年の第14回男子ジョーンズカップに、日本チームの帯同として初めて参加し、コート内外で実に多くの体験をした。わずか14日間だったが、手帳を見ながら振り返ってみる。

7月9日

出発前にちょっとしたトラブル発生。中華航空の事務所から、9日の9時に福岡国際空港のカウンターでチケットを渡すとの連絡を受けていたので、時間通りにカウンターに出向いた。「小池といいます。台湾のチケットが手配されているはずですが。」ちょっと調べた係りの女性が「申し訳ありませんが、名前がありません。」と一言。「エー、ウッソー」と心の中で、ボー然とした私。しかし、気を取り直して「きっとあるはずですので、事務所へ問い合わせして下さい。」と頼んだ。40分後、放送で呼出のアナウンス。カウンターに出向くと、航空会社の事務所にそのまま保管されていたとのこと。やっとチケットを手に入れることが出来た。何となく先行きを暗示させるようなトラブルだった。

福岡から1時間40分で、台北の中正国際空港に到着した。先に東京からの便で到着していた日本チームと、空港で合流。NKKの藤本コーチ、熊谷組の倉石平コーチらと共に、バスで一路、台北の宿舎へ向かう。宿舎で軽く昼食を取った後、早速練習のため市内の体育館へ移動。外はじっとしていても汗が出るくらいである。蒸し暑い。「さすが台湾」と感心する。しかし、体育館に入ると空調が行き届き、快適な環境である。練習は、身体を慣らす程度で、約2時間で切り上げたが、スタンドにはじっと練習を見守る多くのファンがいて、台湾でのバスケットボールの人気の高さをうかがわせた。

夜は、藤本、倉石コーチ、北本トレーナーと共に、台湾ナショナルチームのセンターで、かつて日本の熊谷組に在籍したことのあるチー・トン・チー選手の家族と会食。(彼は台湾で最も高給取りで、かつ人気のあるプレイヤーである。この夜も、レストランでファンの人から声をかけられていた。)初の本場・台湾式の食事にやや戸惑いながら、楽しいひとときを過ごした。“乾杯(かんべい)”攻撃に撃沈させられた。酒に弱い人はくれぐれもご注意を!

7月10日

11時。ホテルでレフェリーミーティング。見渡すと、世界でも著名なレフェリーの顔がそろっている。ソ連のミハエル・ダビドフ氏(ソウルオリンピック男子ファイナルのレフェリー)、ニュージーランドのロビン氏(マレーシア女子世界選手権ファイナルのレフェリー)、アメリカからはウェンディ氏、フィリピンからオマンポ氏、カルロス氏など。このトーナメントの質の高さの一端をうかがわせた。自分がこんな場に居ていいのかなあ、などとちょっと気後れを感じてしまった。ミーティングでは、自己紹介の後、ルールについての徹底した話し合いが行われ、細部にわたるチェッ

クがなされた。いよいよ明日からトーナメント開始である。

7月11日

ゲームは通常、夕方(17:00 頃)から開始である。これは、バスケットのゲームをより多くの人が観戦できるように設定されたものである。体育館では多くの観客が、ゲーム前や合間に、持参した弁当やコーヒーを座席で口にする。一日の仕事の後の本当の余暇時間の善用だなと感じた。聞くところによると、国際大会で朝の9~10 時頃からスタートさせるのは日本か韓国くらいのようなのだ。もっとも、韓国はバスケットが国技のようなものだから多くのファンが集まるが、日本でも大きな大会では、期日は長くなってもせめて夕方からゲーム開始がなされるような、観客を集められる時間でやってみてはどうかかなと思ったりする。ちなみに、8 月に神戸で行われたアジア選手権は、朝9 時からのゲームスタートであった。ダビドフ氏、ロビン氏も来日したが、話を聞くと「信じられない」と異口同音の反応であった。

17:00 からの韓国対フィリピン戦が終わり、18:30 からオープニングセレモニーの始まりである。ファンファーレの後、“裁判(ツァイパン)”のアナウンス。まず最初にコートに入場するのは審判員なのである。話が横にそれるが、これも日本と違うところだ。ややもすれば “審判なんて” と言われ軽視される存在だが、外国では審判員は最も大事にされ、非常に高く評価される。例えばレフェリーへの手当を見ても、日本とは比べものにならない。日本と人気が違うということを前提に、次の数字を比べてみて頂きたい。アメリカのハイスクール 1 ゲーム 5000 円、日本の中国大会 1 ゲーム 1000 円。カレッジ 1 ゲーム 3~5 万円、日本のインカレ 2~3000 円。NCAA のファイナルフォー 20 万~30 万円、オールジャパン(ファイナルもすべて一緒) 3000~4000 円。いかがだろう。私はお金のことだけを言っているのではなく、レフェリーというものが特殊技術を持つ専門家であることを認め、その立場を理解してほしいのである。アメリカのコーチングブックには、レフェリーに対しての対応の仕方をプレイヤーに教えるチャプターがある。必ず “~さん” と丁寧に言いなさい、コールに対し冷静に受けとめなさい、などと、プレイヤーにレフェリーの存在をしっかりと認識させるようにしている。学びたいものだと思う。

私たち “裁判(審判のこと)” の入場に続いて、各国選手団の入場だ。アメリカ(ジュニアカレッジオールスター)、ソ連(クラブチーム)、ドイツ(クラブチーム)、ニカラグア(ナショナルチーム)、香港(ナショナルチーム)、日本(実業団選抜チーム)、そして地元台湾チームの入場である。以前はナショナルチームが多く参加していたようだが、ここ最近ではクラブチーム等が参加するようになり、やや大会のレベルが質的に低下したと言われている。

華やかなセレモニーの後、“本日のメインイベント” の始まりである。地元台湾と、“アジアの経済大国=日本” の対決だ。1 万人近い観客(それでも体育館の 6~7 割くらいである)は、すべてが台湾チームの応援である。“日本チーム、ガンバレ” と声援を送る中でトス・アップだ。プレッシャーからか、また急な混成チームのためか、日本チームは調子が出ず、台湾の一方的なゲーム展開になってしまった。後半に入ってもリズムに乗れず、30 点差もついた痛い初戦敗退となってしまった。予選トーナメントで 2 勝しなければ 7~9 位戦に行ってしまうので、明日の香港戦では必勝だ。

7月12日

6 時からのアメリカ vs ニカラグアのゲームの主審を務める。副審は地元台湾の部正焜氏である。彼は国際審判

員の資格を得て 4 年目だが、海外遠征は 5 回目と、私に比べて経験は豊富。私はなんせ初体験。ゲーム前のミーティング(国際ゲームでは、必ず試合前にレフェリーがミーティングをするようになっている。)も上手く行き、良いコンディションでゲームに臨めた。ゲームはアメリカ(この大会で優勝した。)の一方的な展開となったが、所々にニカラグアの力強いプレイも出ていた。また、力負けせず、時にはラフになるプレイもみられた。国際ゲームでは特にラフプレイに注意しなければならない。ひじを使う、膝を使う等は日常茶飯事である。このゲームでも、ニカラグアのプレイヤーがひじを使ったプレイを行ったので、私は、アンプレイヤーライクだと判断し、テクニカルファウルを即、宣した。ゲーム後に振り返ってみるに、コンタクトも若干あったのでインテンショナルファウルの方が良かったかもしれないが……。悪いプレイ、危険なプレイは決して見逃すことなく、その瞬間をとらえて適切な処置をすることが必要である。

ゲーム終了後、必ず両チームのスタッフは相手チームの健闘をたたえ、握手をかわす。勿論、レフェリーとも。アメリカのコーチが、”グッド・ジョブ(よくやった)”と声をかけながら握手を求めてくれた。記念すべき海外初ゲームは無事終了した。

同じ日、日本は香港と対戦、楽勝だったようだ。これで一勝一敗となった。明日はコリア戦だ。キムチパワーに負けるな。

7 月 13 日

今日はレフェリーのいない日である。しかも日本のゲームは 6 時からなので、一人で台湾市内観光としゃれこんだ。目指すは有名な故宮博物館である。台北市の北に作られた、中国 4 千年の遺産が多く残され、観光客が必ず訪れる所である。土器、書画など、見る者を圧倒するような展示品であった。あっという間に 3 時間が過ぎていた。

ホテルに帰る時に、またハプニング。一人の中年が近づいてきて、「台北駅方面に行くのだったら、安くしておくよ」と一言。白タクである。値段を交渉すると随分安いので、好奇心がムクムクと出て、結局ホテルへ帰る約束で乗ることにした。車内で自分の仕事やら世間話を交わすうち、何となく変なムードに。「ルイ・ビトン、シャネルのバッグ、ベルトなどいらぬか」ときた。さて何のことやらと「興味ない」と答える。すると「コピー商品だけど一度でいいから見て下さい」ときた。こちらも別に急ぐ用があるわけでもないのに、「じゃ、つれて行って下さい。」車は小さな路地に入り、階段の前で止まる。彼に続いて階段を上がる。インターホンで中の人とやりとり。ガチャリと鍵を解く音がし、ドアが開けられる。随分警戒している様子である。数人の、一見して日本人とわかる観光客が商品を物色していた。品物を見せられる。コピーと言われなければ当方には全くわからない。値段はすこぶる安い。通常の 10 分の 1 くらいの値段である。しばらく店内を見回す。店の女性が近づいてきて、あれこれと勧める。「いらぬ」と答える。かわって、くだんのおじさんがやってくる。コピーと知って買うほどバカらしいことはないと思っているので、「いらぬ」の一点張り。あまり長居をしてもと思い、「ホテルへつれて行ってほしい」と言う。おじさん曰く、「ちょっと用事が出来たので近くでタクシーを拾って帰ってくれ」と。私は「約束が違うじゃないか」と言いたかったが、まだここまでのお金を払ってもいなかったし、ひょっとしてトラブルに巻き込まれたら困ると思い、黙ってその店を出た。幸いタクシーも簡単に拾うことが出来、無事ホテルに到着。ちょっとスリルのある経験だった。

18:00 からいよいよ韓国 vs 日本戦である。昨年の北京アジア大会で、日本ナショナルチームが予選で韓国を破ったゲームは、私たちを興奮させたものだ。韓国では、日本に破れたと大問題となったそうである。ここ台湾の地でも同じ夢をと期待を抱いてゲーム観戦。しかし全くその期待を裏切られてしまった。確かに、ナショナルチームではなく実業団の選抜だから、勝つことはむずかしいとはいえ、ゲームでは全く最初から相手にしてもらえなかった。大敗であった。こうなったら決勝リーグに残るためにも、明日のフィリピン戦は是が非でも勝って欲しい。

7月14日

今日の私のレフェリー割当は、ドイツ vs ニカラグアである。主審は韓国の李章鶴氏である。韓国では日本リーグと同じようなリーグ戦があり、これをジャンボリーグと呼ぶ。1~2 万人の観客を常に集め、人気選手はまさにアイドルスターのような扱いだそうである。李氏は、高校の体育教師であるが、常に重要なゲームにはお呼びがかかるそうである。(もともと、昨年からはジャンボリーグではレフェリーのプロ化を実施し、15 名前後のレフェリーがローテーションでゲームを担当するシステムが取り入れられている。) 李氏のスタイルは韓国のレフェリーに共通したもので、動きが少なく、だいたいサイドでもエンドでも立ち止まっている。細かく動いて見ようとは一切しない。速攻が出て、リードオフィシャルとしてプレイを先行しようとはしない。場合によってはエンドラインにも入らず、その1~2m 手前くらいでじっと止まって見ている。几帳面な動きを教えられた日本人レフェリーとしては、何ともいい加減な感じがするが、こと ”判定” にかけてはやはりピカーである。絶妙のタイミングで笛を鳴らし、正確に処置をしていく。悪い角度からでも平気で笛を鳴らすなど、”ちと” 首をかしげたくなることもあるが、本人は堂々としたものである。キャリアの豊富さがうかがわれたレフェリーであった。

ゲーム後に、貴重なアドバイスをもらった。その一。ファウルのコールの時、あまり長くプレイヤーの目を見つめない。その二。プレイヤーのクレームに対し、あまり過敏に反応しないこと。その二について、ゲーム中にこんなことがあった。点差が多くひらいたゲームであったが、ドイツのあるプレイヤーが、自分のプレイが思うように出来ずイライラしていた。そして、そのプレイヤーがミスを犯し、ファウルをした。本人の不満がレフェリーに向かってきた。すかさず私が “What?” といった。するとすぐにそのプレイヤーが ”Ref,what?” と、眼光鋭く返してきた。何事もなくそのプレイヤーは交代させられたが、その場面を見て、李氏が先に述べたアドバイスをしたわけである。短いことばのやりとりであったが、緊張した瞬間であった。

李氏とは、台中に移動した 5 日間は同部屋で、寝食を共にし、バスケットの話から、家族のこと、お互いの国のレフェリーの話、チームのこと等、いろいろと話した。酒をこよなく愛し、人への優しい心遣いがなされる紳士であった。

この日、別の会場で行われた日本 vs フィリピン戦は、残念ながら日本の敗北におわってしまった。翌日、藤本コーチらと話をすると、選手のほとんどが下痢に悩まされていたということだ。食事が脂っこいものばかりで、胃への負担が大きく、この頃はもうホテルでは食事を取らず、近くの日本食堂へ出かけているという。海外での試合に勝っていくことは、力は言うまでもないが、食事その他の異なった環境を克服することが、とても大事なことなのだと考えさせられた。残念ながら日本はニカラグア、香港の 3 チームによる下位(7~9 位リーグ)に行くことになったが、”日本食パワー” で最後まで全力でやってほしい。

7月15日

大会中盤となり、今日から台中へ移動となる。約3時間の旅程だが、移動のバスはニカラグアチームと一緒にいる。すでにニカラグアのゲームを2ゲーム吹いているので、スタッフ、プレイヤーとも顔なじみとなり、話をかわす程度になった。長い内線が続き、国内経済もとても劣悪なニカラグアであるが、プレイヤーからは全くそんな暗さはみじんも感じられず、ランバダのビデオを見ながらバスの中で陽気にはしゃぐ姿は、まさに南米の人だなあと改めて思い知らされた。プレイヤーは、比較的国内でも生活に余裕のある人たちのようだ。

台中の会場は、国立体育大学の体育館であるが、バスケットボール専用であり、約1万人を収容することのできる、観客から非常に見やすい会場である。周辺では、トーナメントの新聞や記念Tシャツが販売されたりとなかなかにぎやかであった。コート周辺の世話は、日本でいうボーイスカウト、ガールスカウトの子供達であった。最初は遠くからジロジロと見ていた彼らも、何度も顔を合わすたびに声をかけあうようになり、互いにカタコトの英語で話をするようになった。日本から来たというと、異口同音に「是非、将来行ってみたい」との答が返ってきた。

さて、今日の注目のカードは韓国と地元台湾の対戦である。両チーム共、ナショナルチームの陣用でこの大会に臨み、神戸ABCのまさに前哨戦であった。身長は両チームさほど高さはないが、共にスピードがあり、好ゲームが期待された。会場は満員であった。試合は予想通り僅差で展開されたが、後半に入り、台湾のミスが連続し、一方韓国は、3ポイントライン外からのボールが、まるで機械で打ち出されたような正確さで次々にリングを通過していき、結局は15点差で終わった。センターの出来具合の差でゲームが決まったような感じであった。しかし、それにしても韓国のプレイヤーのシュート力には驚かされた。かつての日本ナショナルチームのシューターであった谷口選手(NKK)が3~4人いるようなチームであった。改めて、バスケットボールのゲームでは点を多く稼いでくれるプレイヤーがいなければだめなのだなあと思い知らされたものである。一方、彼らの強い精神力(いろいろな表現があると思うが)も見習うところではないか。

北京のアジア大会で日本女子チームが3決で力なく負けたゲームで、テレビ解説者が、「日の丸をつけていることをもっと意識して欲しい」という意味のことを言われたが、まさに日本のナショナルチームに必要な要素ではないだろうか。昨日一緒に笛を吹いた李氏の話を知ると、韓国ナショナルチームは、個人が所属する企業チームのゲームが終わればすぐに合宿生活(軍隊のように厳格だそうである)が始まり、徹底的に鍛えられるそうである。しかし、厳しいだけでなく、その見返りに莫大なものが与えられるという。ある大会後、韓国のスーパースター、サウススポーのチェ選手に、何と家が一軒ボーナスとして与えられたそうである。これではプレイヤーもハッスルしようというものである。

7月16日

今日の割当はニカラグア vs 香港戦。ニカラグアチームはまさに一戦一戦うまくなってきた感じで、香港チームの力量がかなり劣っていたこともあるが、ゲームは大差でニカラグアチームの勝ちであった。国際ゲームでもこんなに差がつくこともあるのだなあと、ゲーム終了後“変な”感心をしたり。

7月17日

今日は審判はなし。日本チームの応援団と化す。相手はNCA。混成チームのためチームカが今一つの日本は、立ち上がりから次々に加点される。NCAのセンターは、荒削りではあるが若くパワフルで、徐々に上手くなっ

てきた感じである。後半に入り、ようやくエンジンのかかった日本チームは、オールコートプレスが効を奏し、やっと相手をつかまえることが出来た。最終的には 10 点差であったが、やや日本チームに ”スキ” があったような気がした。

ゲーム後、日本チームのコーチングスタッフと共に、日本料理店へ行く。こちらに来て初めての日本食であるが、残念ながらお世辞にも旨いといえるものではなかった。数種類の料理を注文したが、どれもいまちという感じである。でも周りの台湾人のお客達は結構旨そうに食べており、店もかなり繁盛していたので、きっと味付けが台湾の人に合うようにほどこされていたのであろう。初めて海外で日本料理店に入ったが、何か看板に偽りありの気がして、日本人としては ”本当の日本の味” を正しく外国でも出して欲しいと思った。

料理の話はさておき、今回の遠征で大きな収穫の一つは、日本の将来を担う二人の若きコーチと色々な話しを交わすことが出来たことである。今晚も、日本リーグ、レフェリーの待遇や育成のこと、また NKK や熊谷組のチーム練習のことなどについて延々と話が続いた。藤本コーチ 40 才、倉石コーチ 35 才。この若きコーチが熱っぽく話すその姿に、今こそ日本のナショナルチームは弱体化の一途ではあるが、いつか彼ら若手コーチが一致協力し、強い日本を作ってくれるのではないかとの希望を抱かずにはいられなかった。

ややホロ酔い気分で、自分のホテルへ。

7 月 18 日

今日はファイナルゲーム担当である。USAvsFRG。相手レフェリーは、韓国の李章鶴氏である。ドイツチームの頑張りがこのゲームのキーであったが、スタートから馬力の違いをアメリカに見せつけられ、ゲームは始終一方的な展開となってしまった。

さて、このゲームで、アメリカ選手に対し今更のように感心させられたことがいくつかある。①選手の身のこなし ②ディフェンスで無理をしない ③パワーあふれるプレイ ④たくましい精神力。

① 選手の身のこなし

ディフェンスを巧みにかわしていくドリブルのうまさ、フロントチェンジ、バックターンなど、大きいプレイヤーがすばやくおこなうだけに、ディフェンスは対応しきれない。また、レフェリーの立場から ”チャージングか” と予想されるプレイも、コンタクトの直前でまさにひらりと身体をかわし、ディフェンスへの衝突を避ける。反射神経のすばらしさか。

② ディフェンスで無理をしない

日本人プレイヤーの一つの欠点は、オフenseプレイヤーのコースに無理に入り込む ”神風ディフェンス” である。確かにコースチェックは当然すべきだが、無理なところから行ったり、シュートにふみ切った前に入り込んだりと、オフenseプレイヤーにけがをさせってしまうようなことが多い。しかも、時にはコーチがその ”突貫プレイ” を賞賛するといった光景もみられる。何をかいわんやである。相手プレイヤーのことも考えて、お互いに ”バスケットボールを楽しむ” という意識を持って欲しいと思う。

③ パワーあふれるプレイ

ポストの争いは、やはり力強い。ある面では、リング下でのプレイヤーの身体のぶつかり合いが、バスケットボールの魅力の一つといえるだろう。日本のプレイヤーも、フィフティ・フィフティの場合には、押され負けない程になって欲しい。またプレイヤーも少々の押し合いで「いたい」「押した」などと文句をたれずにプレイに専念してもらいたいと思う。

④ たくましい精神力

ルーズボールなどへの迫力はすごい。絶対に自分のボールにするのだとの意気込みで突進する。また、自分のミスに対しては本当に心から悔しがる。一方、味方の good play は心から賞賛し、喜び合う。

トーナメントもあと3日間となった。

7月19日

今日もニカラグア vs 香港戦のレフェリーであった。大差のゲームばかりで、ややレフェリー割当に不満に思った時もあったが、なんせ台湾の割当をする人にとって、私は”初見参”で実力もわからないわけだから、仕方がない。最後のレフェリー割当であったが、自分としては十分に楽しむことができた。

7月20日

今日はこのトーナメントを通じて、多くのアドバイスを受け、よき友人となった、フィリピンのレフェリー、ローランド・オマンポ氏に時間を割いてもらって、レクチャーをお願いした。朝食の後、フロントサイドのティールームで。

1. Public Relation – communicate with each other

トーナメントでは、いろんなレフェリー、またチーム関係者が一同に会する。従って、お互いのチャンスをみつけて、できるだけ知り合いとなれるよう話をかわすことが大切である。レフェリー同志が互いの気心がわかり、意志の疎通が上手く行けば、ゲーム運営もかなりのパーセンテージでスムーズに行くはずである。また、チーム関係者とも、必要以上に話すことはないが、笑顔で接することを忘れないようにしたい。コーチとレフェリーは、ゲーム中は衝突する事はあるが、互いにバスケットボールを愛する気持ちは一緒なのだから。

2. Common Sense

バスケットボールの常識を常に頭においておこう。特に次のことは大事だ。ニュートラルレフェリーの判定はよく注意して見ておくこと。そして、そのトーナメントでは、そのレベルに従うことである。

(今回のトーナメントでは、ハンドチェックをどのように判定するか、私としては非常に興味を抱いていた。日本では当初、とても厳しく取り上げており、プレイヤーを含めやや戸惑っていた。ニュートラルレフェリーは、一切笛を鳴らさず、全く今までと変わらない基準であった。オマンポ氏曰く、「フィリピンでも日本と同様に、各チームにハンドチェックはファウルと指示している。しかし、このトーナメントでニュートラルが吹かないのだから、君も無視しろ」と。)

3. Knowledge of The Rules

ルールに精通することは、レフェリーにとって最も大切なことである。私たちの拠り所となるのは、常にルールブックである。

4. Consistency

チームにとって最も困るのは、レフェリーが同じ現象を、ファウルとしてとりあげたり、またある時はファウルにしなかったりということである。ゲームの最初から終わりまで、一貫した基準で笛を吹くように心がけなければならない。

近年、ファウルゲームが戦術としてとられることがあるが、レフェリーが、終了間際だからといってインテンショナルファウルにしてしまうケースがまま見られる。ゲームのスタート時にそれ(同じプレイ)をインテンショナルファウルとしてとりあげていたのであればよいが、そうでなかった場合には、いくら点差が拮抗し、ゲーム終了間際といっても、同じ判定をするべきである。

5. Read (Know) Your Partner

相手レフェリーが、どのような判定をするか、どのような動きをするか、ゲーム開始からよく見ておくこと。そのことにより、自分の動きを考え、また、判定を考えるのである。

以上、オマンポ氏からのレクチャーを5点にまとめたが、初の国外トーナメントに参加した私にとっては、今後のためにとっても有意義な、また参考となるアドバイスであった。

7月21日

トーナメント最終日である。ファイナルは、アメリカ vs ソ連であった。ゲームとしての盛り上がりは前半までで、最後はアメリカチームの力だけがやけに目立ったゲームであった。

ゲーム終了後、直ちにクロージングセレモニーの開始である。今回は入場行進はなく、いきなり各チームのプラカードの前に集合である。ここでも粋な計らいというか、これが外国ではよくあることなのか、まず最初に、レフェリーへの感謝楯の授与である。一人ずつ名前を呼ばれ、前に出て受け取る。そして手をあげ、観衆にこたえる。なんとも爽快な気分であった。続いて1位からの表彰である。華やかなうちにセレモニーは終わりを告げ、トーナメントは終了した。

夕食は非常にリラックスしたムードであった。14日間にわたるトーナメントを一緒に過ごした仲間が最後に集う夕食である。いろんなことを思い出し、話に花が咲き、またいつか会おうと互いに約束しながら、夜のふけるのも忘れてビールを注ぎあっていた。願わくば、このまま明日もまた新たなトーナメントがスタートすればなあと思ってしまった。ホテルの外では、素晴らしい月が空に浮かんでいた。また、この月を満足した気持ちでながめたいものだった。

駄文におわり、バスケットボール以外の話も多く、全く『南風』の主旨に添わない報告書となったことを最後にお詫びしたい。

さて、今回の私の体験は、まさに今までの私を井の中の蛙と悟らせることになり、自分のいたらなさ、今後やる

べきことを見つけさせてくれたと思っている。この経験を生かし、今後更なる精進を続け、山口県バスケットボール協会のために尽力しようと考えている。今まで同様、ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いする次第である。

山口県高体連バスケットボール専門部機関誌「南風」第3号(1992年(平成4年)1月発行)に掲載
登場人物の肩書き等は掲載当時のものです。

この文章の無断転載は固くお断りします。